

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

新潟市若者支援センター「オール」

私は現在、『新潟市若者支援センター オール』の相談員として勤務しております。

『新潟市若者支援センター オール』は、若者の社会的・職業的自立に向け、全ての若者が自分に自信を持ち、社会性を身に付け、夢や目標に向かって動き出す支援をする施設です。（ただし、新潟市在学・在勤の15歳から39歳までの本人及び家族の支援）

若者支援センターは、相談・居場所・事業といった若者支援の3本柱で成り立っています。①相談は、若者やその家族の相談を受け、適切な支援機関・団体と連携し、若者を支援していきます。②居場所は、ユースアドバイザーが若者を見守り、話し相手になったりミニ講座を開催したりします。また、いろいろなスペースがあり、自分の目的にあった時間を過ごすことができます。③事業者や団体の自主的活動をサポートします。

私たち相談員は、相談面接で相談者の話を丁寧に聞いて課題を整理し、今後の支援内容を提案します。その際、雇用・福祉・教育・医療など、さまざまな専門機関と協働支援体制を整え、若者の課題に沿った適切な支援をしていくといった流れで動いています。

興味のある方は、ぜひ新潟市のホームページをご覧ください。

39歳で大学入学

入学を決めた理由は、「必要に迫られて」がいちばん近いでしょうか。

当時の私は、中学校の相談員でした。主に、いじめ、不登校、問題行動（非行問題）などの相談を受ける、各学校に配置された相談員のひとりでした。

相談員に就くにあたっては、研修やさまざまな講習会を受けていました。また、関係する本も読みあさっておりました。しかし、ある時からその研修や講習では、子どもたちや親御さんに向き合うには何かが足りないと感じるようになりました。ある時、どんどん奈落の底に落ちて行く非行少女から初めて「助けて」という言葉が出た時に、警察に出向いたことがありました。警察官は私からの説明をしっかりと聞くことはなく、鼻であしらわれたような気分で、私はその場をあとにしました。あとになり振り返り考えてみた結果、自分なりに説明したつもりの説明が、理論的な説明ではなく、中身の無い、ただ感情的な説明だった自分に気づかされました。『これでは、子どもたちを守るなんてできない。子どもたちを支え、生きる力を与えるには、何かが自分には足りない』と思うようになりました。

その頃、東北福祉大学の通信教育部開校のCMが連日のように流れておりました。さとう宗幸さんが出演していたCMです。「勉強したいな。」と思ってはいましたが、当時、双子の息子たちはまだ保育園の年長。「あ〜無理無理」と頭から払っておりましたところ、主人から「福祉大で勉強してみたら？まずは、資料申請出してみてさ…」という言葉が出ました。主人は、私が毎日、走り回っていたり、悩んでいたことを理解してくれてはいましたが、まさかここまで背中を押してくれるとは思ってもおりませんでした。

卒業まで6年かかりましたが、一度も辞めようと思ったことはありません。それは、バックアップしてくれている家族への感謝もありましたし、困難を抱えた青少年の顔が浮かんできたこともあります。そして、大学で知り合った同士たちに支えられたと言っても過言ではありません。レポー

トを何度も返され萎えたことや科目修了試験で徹夜したことは、今となってはいい思い出になります。若い時のそれより、ずっと身になると感じました。

大学で学んだこと

何よりも力がついたと感じていることは、目の前にいるクライアントの見立てです。レポート作成では教科書以外に、多くの参考文献を読みあさりしました。そのおかげで、頭の中にたくさんの引き出しができました。さらにスクーリングでは、先生方から多くの知識をいただきました。今でも、疑問などが出てきた時には、教科書や購入した文献、スクーリングの際の板書を開き、目を通すこともあります。

私は、レポートを何度も返されたことがあります。正直、悔しいとも思いました。返された教科を少しの間、無視していました。その間、他の教科のレポートは合格で戻って来ていました。そこで、合格と不合格（返却されたレポート）はどこが違うのかを徹底的に読み、考えました。返されたレポートは“自分本位”の文章であることがわかりました。先生が何を書いて欲しいのか、理解して欲しいのかということをろくに考えずに書いていたのです。おそらく、返却された経験のある方は納得していることと思います。

大学に入学する前は、さまざまな講習会やワークショップに出て、学習しているつもりでいたのですが、復習したり、レポートに書くことがないので自分のモノにはなりません（私の場合）。

繰り返し学習することで、色々と疑問も出てきて理解する力が付くのだと私は思います。

最後に

私は、開校年度（2002年）の10月生でした。それから6年して卒業できました。卒業式は感動しました。家族、職場の人間、友人たちに卒業証書を写メで撮り、送信しまくったことを覚えています。

子育てしながら、仕事をしながらの学生さんも多いことでしょうが、現役の学生さんよりも引き出しは多いはずです。引き出しが多いほどレポートは書けると自負しています。

最後に、木村 進先生は授業の中で『ずっとあなたの傍らにおりますよ』という言葉をクリックに投げかけるとおっしゃっておいりました。私はこの言葉を聞いた時に、身体に電気が走ったのを覚えています。世の中にはこの言葉を待っている方々が多くいらっしゃると思います。私はこの先、ひとりでも多くの方々にこの言葉を心から発信していきたいと思ひます。

スクーリング・アンケートより(2)

p. 12に続き、スクーリング・アンケートより、受講後の感想の一部を紹介いたします。

●障害児の心理

- ・「障害のある子ども」「障害のない子ども」であっても「子どもは子ども」であるという視点、いずれの子どもであっても「発達」していくという視点は改めて子どもはもちろんのこと、障害のある人全般を見る上で重要なことだと感じました。
- ・発達障害児を考えるとときに診断の枠に当てはめて考えがちだが、症状が重複していたりして簡単に決めつけられるものではないと改めて考えさせられました。まず、発達の視点で考えること、個として考え支援することを基本に関わりを考えていきたいと思いました。

●産業カウンセリング I

- ・産業カウンセラーがクライアントに援助を行う場合、受容も必要であるが職場復帰が出来るように対処していく考えはもっともであると思った。以前は個人対個人というイメージが強かったが、それでは本来の解決にはつなげていない事にも気づくことができた。
- ・サバイバルのワークを通して、自分の意見と違う意見は聞いているようで聞いていなかったり、自分の意見と一緒になるように誘導していたり自分のコミュニケーションのくせに気づくことが振り返ることができた。何事も振り返りが大切だと思った。コンセンサスによる集団決定を体験して自分の意見でも他人の意見もOKという感覚をもてた。不満がない、答えの出る体験はとてもよかった。

●スポーツ（バーンゴルフ）

- ・バーンゴルフは誰もが平等に楽しく体を動かせるスポーツだと感じた。こういったスポーツを多くの人に知ってもらうにはどうすればいいかということこれから考えていきたい。

●人間と教育

- ・普段は高齢者の終末に関わる支援をしています。今回スクーリングでは人間の誕生からの教育について講義を聞かせて頂き、いつもと違う捉え方で人間について考える時間を頂きました。高齢者支援は残された人生をそのように過ごしていくのかですが、教育はゼロからどのように育てるか？人間にとって大切な課題だと気づかされました。